長崎砂糖考（2）

本会幹事　村崎春樹

長崎へ砂糖はどのくらい輸入されたのか

長崎への砂糖の輸入は、オランダ貿易と唐船貿易によって行なわれていた。
砂糖輸入量は、つぎのとおりである。

単位：千斤

	オランダ船	唐船					
年号	砂糖	黒砂糖	白砂糖	氷砂糖	三盆砂糖	砂糖	合計
宝暦5年(1755)	1,660	61	739	83	52		934
宝暦6年(1756)	1,550	1	1,477	35			1,513
宝暦7年(1757)	1,520		1,666	67			1,733
宝暦8年(1758)	770		902	256			1,159
宝暦9年(1759)	2,290	62	785	236	2	13	1,100
宝暦10年(1760)	1,580	6	1,010	59			2,655
寛政10年(1798)	420	190	640	7	100		938
寛政11年(1799)	210	123	832	88	195		1,238
寛政12年(1800)	580		426	32	80		539
享和元年(1801)	250		2,256	133	58	100	2,548
享和2年(1802)	1,510		1,135	290	132		1,557

尚、ここで用いている単位は斤であり、600g/斤に相当する。
本表の輸入量は、オランダ船は明坂英二著『シュガーロード』より、また唐船は永積洋子編集『唐船輸出入品数量一覧』による。オランダ船と唐船が持ち込む砂糖の輸入量は、時代により比率は変わるが、おおよそ半々と考えられる。
宝暦5年（1755）には、1,557トン、約50年後の享和2年（1802）には1,840トンが長崎へ輸入されている。

長崎での砂糖取引について

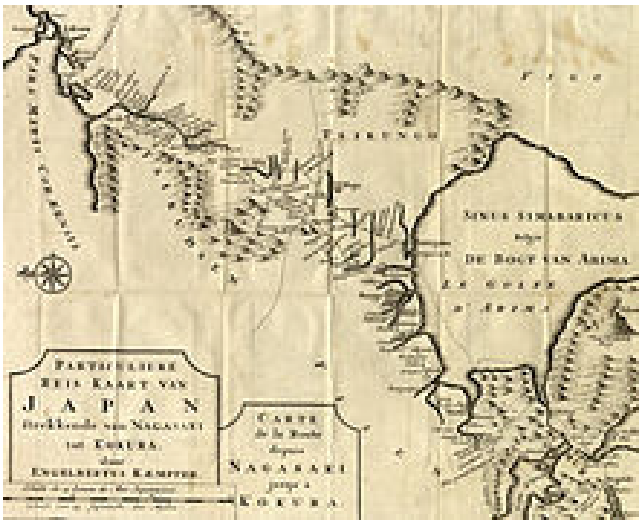
長崎では、砂糖取引と流通は、正式な貿易として長崎会所を通して行う本方荷物、脇荷物と幕府や代入家への誂物・献上物が正式ルートであったが、この他に長崎の役人への贈り物としての砂糖や出島や唐人屋敷へ出入が出来た丸山遊女への支払や貰い物の砂糖、さらにオランダ船や唐船の荷役作業に従事した日雇い人夫によって運搬容器（袋や篭）から溢れた砂糖を拾得する盈物砂糖などを取引する非正規ルートが存在した。丸山遊女への支払いや贈り物砂糖は、原則長崎会所を通じて行われ、その代金が遊女には渡された。遊女への貰い物砂糖は、18世紀半ばでは年間50トン近くになった。また盈物（こぼれもの）砂糖は唐船だけでも年間60トンを超え、出島での盈物砂糖も同じだとすれば100トンを超える盈物砂糖が流通したと推定できる。贈り物や盈物の砂糖は長崎市中の仲介業者によって、長崎市内で売買されていた。
八百啓介（北九州市立大学文学部教授）著『砂糖の通った道-菓子から見た社会史-』では、これら非正規ルートの砂糖の量は輸入量の10%から20%であったと推定している。
正規ルートの砂糖は、長崎会所によって大阪の唐薬問屋へ送られた。

シュガーロード（長崎街道）は砂糖の裏街道

オランダ船や唐船にて運ばれてきた砂糖は、長崎会所の手で、正規の輸入品の証明である手板をつけた砂糖籠や砂糖袋は、船尾に御用の幟を立てた唐紅毛物専用の廻船である堺船に積み込まれ大阪へ向けて海路を進んだ。大阪では長崎から運ばれてきた輸入品は唐紅毛物問屋が独占的に取扱っていたが、後に生糸や反物を取扱う唐反物問屋と唐薬、砂糖、荒物などを唐薬問屋に分化し、砂糖はこの唐薬問屋を通して砂糖荒物仲買に卸された。これらの仲買は大阪堺筋に多くの店を構えて戎講、大黒講、弁天講の独占的同業組合に分かれていた。この大阪から江戸など全国へ流通していった。江戸へは菱垣廻船や樽廻船にて海路を運ばれていった。江戸では江戸十組問屋の薬種店組が取扱ったが、薬種問屋仲間から砂糖専門の25店が独立して江戸砂糖問屋が文化6年（1809）に発足した。仙台藩藩医工藤平助の『報国以言』よれば18世紀後半に輸入された白砂糖1500トンのうち900トンが江戸で消費され、その中で600トンが庶民によって消費されたという。また、幕府勘定奉行所支配勘定太田南畝（蜀山人）は天明8年（1788）江戸では1日に160樽の黒砂糖が消費されたといい、『五月雨草子』によれば文化・文政期には江戸で1日600キロの白砂糖が消費されたとしている。
ところで、輸入品である砂糖がすべて海路で大阪へ集荷されたのであれば、シュガーロードとしての長崎街道は存在し得ないことになる。しかし、非正規としての盈物、贈り物などの砂糖は長崎市内で売買され長崎街道を通じて流通した。また長崎警備を隔年交代で行っていた佐賀藩、福岡藩が長崎で買い付けた砂糖も、この長崎街道を通って行った。このように非正規ルートの砂糖は、ひっそりと長崎街道を通り佐賀、福岡、小倉、熊本へ流通していった。まさに砂糖の裏街道であった。天保8年（1837）の全国各地の献上物を番付で示した『諸国繁盛寄数望』では九州北部に砂糖が多く、次のように記載されている。

白蜜　肥前佐賀、肥前島原
白砂糖　肥前島原
氷砂糖　筑前福岡、肥前佐賀、肥前小城、肥前蓮池
砂糖漬　肥前島原、豊後杵築
蜜漬　美濃大垣

この事からも、非正規の砂糖が長崎街道を通じて流通していたことが窺える。長崎街道は、砂糖の裏街道としてのシュガーロードであった。（次号へ続く）



元禄頃の長崎街道（ケンペル『日本誌』、1727年刊）